



Title	8章 子どもたちから学ぶ地域創造の手がかり：児童の記述表現を用いた環境認識調査(地域創造と大学)
Author(s)	横尾, 美智代; 齋藤, 寛
Citation	地域創造と大学 (長崎大学公開講座叢書 11) p.103-118
Issue Date	1999-03-01
URL	http://hdl.handle.net/10069/6419
Right	

This document is downloaded at: 2019-07-16T08:38:07Z

8章 子どもたちから学ぶ地域創造の手がかり —児童の記述表現を用いた環境認識調査—

横尾 美智代・齋藤 寛

1節 研究の出発点

研究者が地域と関わる時は、多くの場合が研究者自身の研究テーマや興味の対象を通してその地域に接近していくことになる。テーマや接近方法はそれぞれの研究者の持つ重要なオリジナリティの一つであるから、100人の研究者が同じ地域を観察したとしても、その観察内容や接近方法は100通り存在することになる。言い換えると、地域は100人の研究者に100の姿を見せていると言えよう。その見せ方（見え方）は社会経済、医療、文化、地理など研究者の観察する側面によっても異なるであろうし、観察のための手法によっても異なるであろう。それはまるで万華鏡が様々に美しさを変化させるように、地域も様々に異なる姿を見せてくれるのである。このことが、地域とかかわる研究を行うことの興味深い点であり奥深さでもある。

著者らが本研究で用いた「地域の眺め方」は、そこに暮らす人々（児童）の記述表現を通して、人々の周囲の環境への視点を観察するという方法である。対象とした地域は、長崎県島原半島の雲仙普賢岳の裾野に広がる一地域であり、先の噴火災害で多大なる被害を被った地域でもある。火山を多く抱える日本においては噴火災害に遭遇することは決して他人ごとではないが、そのことに危機感を持って暮らしている人は決して多くはないだろう。現に、この地域においても噴火後に「まさか、この山が噴火するとは思わなかった、こんな経験をすると想像もしていなかった」という類の言葉を何人もの住民から聞いた。この地域に住む人々が経験した突発的噴火災害は地域の暮らしに大きな影響を与え、山の変化はもとより自己を取り巻く環境の変化について考える機会となったことは間違いない。それは大人だけではなく、児童も同様である。特に児童は環境や自分の健康に関連して大人と異なったものの見方、考え方をすることが指摘されている^{2) 3) 4)}。そこで、著者は地域で暮らす児童が突発的環境変化

を体験した時に、(1) 児童が注目していた災害関連の生活・環境変化、(2) 環境や生活変化を体験する中での児童の視点の方向性、(3) 特異な環境下で、児童が視点を合わせていた具体的対象物(者)の特徴、という3点について研究を行った。

2 節 研究の対象

研究の対象地域は長崎県南高来郡深江町であり、同町立A小学校の児童が書いた作文を研究の対象とした。対象地域の背景について少し述べると、深江町は雲仙普賢岳の山麓に広がる人口約8000人の農業を中心とした町である。長らく噴火活動を行っていなかった雲仙普賢岳が1990年に約200年ぶりに再び活動をはじめたことにより、その後約5年半の間、多くの町民が避難生活、家屋・田畑の流出や長期に渡る降灰などに苦しめられた地域としても知られている。町内には3つの小学校と1つの中学校があり、噴火が最も激しかった1991年には町内の全小中学校が避難のために1校に集合し、共同で学校生活を送った時期もあった⁵⁾。本研究の研究対象である作文を執筆したA小学校の児童も、この期間に学校施設の焼失、体育館・旅館・親戚宅などへの避難生活や、それに伴う仮転校、防塵具を着用した登下校あるいはバス通学などを体験している。またこの小学校は校区全体が被災地であったため、他の小学校区とくらべると共通した被災体験を多く持つ児童集団であるという特徴も有している。著者はこのA小学校において1993年3月に発行された作文集⁶⁾から2、3、4年生(1992年当時)の児童64名(男子31名、女子33名)が書いた雲仙普賢岳の噴火災害に関する作文を研究対象とした。

3 節 研究方法

本研究において目指したのは、児童の突発的環境変化(ここでは噴火災害)に対する認識を作文を通して観察することにある。そこでまず、児童が作文を執筆した時の状況について教師から聞き取ったところ、教師は『普賢岳が噴火してからみんなのまわりでいろいろなことがあったね。その中で特に心に残っ

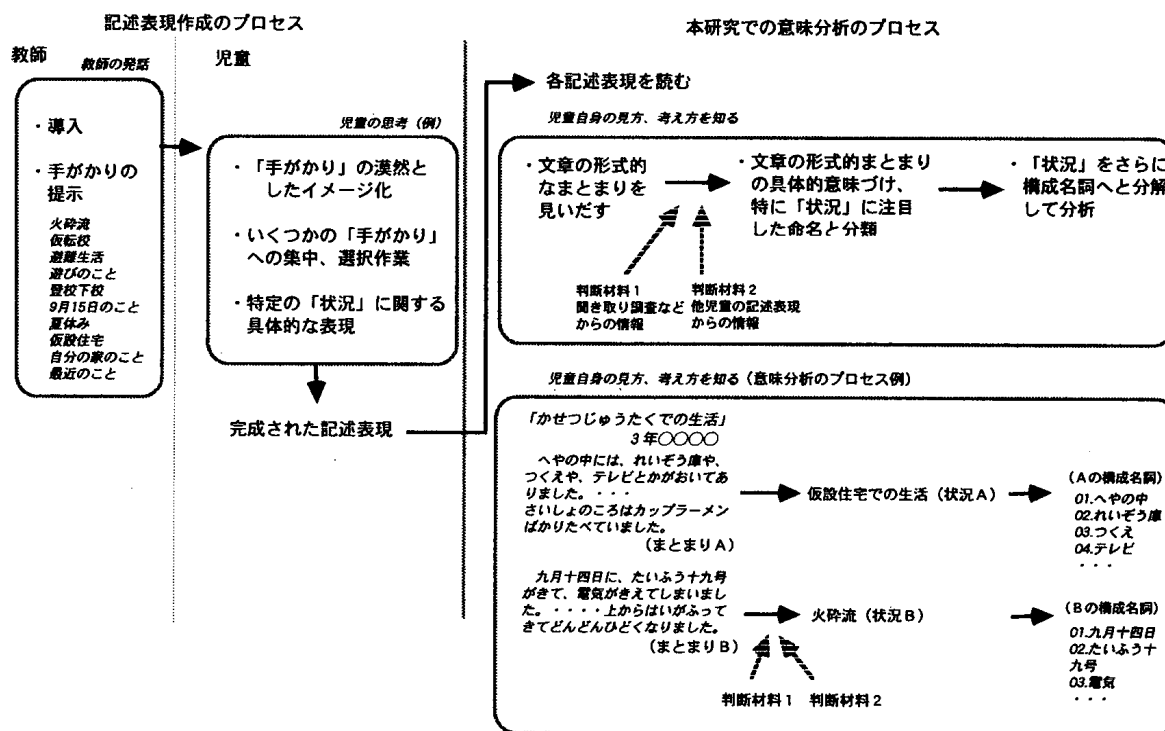


図1 児童の記述表現執筆から本研究の分析に至る過程および分析例

た出来事や体験を書いてごらん』と、児童の注意を噴火による環境・生活変化に向けさせた後、図1の左はしに示したような10個の手がかりを板書するか、口頭で述べていた。指示を受けた児童はその10個のうちのいくつかに注意を集中し、イメージ化と文章化を進めたと考えられる。この過程は図1の左から2段目に示した。このような児童の執筆過程を念頭においたうえで、著者らは児童の記述表現を読む作業を開始した。

まず、最初に個々の記述表現の構成に着目し、文法的な手がかりを参考にして、「形式的な文章のまとまり」を見いだす作業を行った。得られた「形式的な文章のまとまり」に対して、今度は記述表現作成時の教師の指示、予備調査結果、児童自身が作文につけた題名などを判断材料に、意味を考え、分類を進めた。作業は研究者らが個別に行うことで客観性を高めた。「形式的な文章のまとまり」の把握については研究者の結果が一致し、また各まとまりが児童の環境・生活変化に関連した何らかの「状況」を意味することについても判断がほぼ一致した。さらに個別の「状況」下で児童が印象深くとらえていたことがら何であるかを実証的に探るため、名詞に着目し、「状況」をその構成名詞へと分解した上で分析を進めた。分析の実例を図1右側に示した。本研究は児

童の認識や体験について、本人の記述を大切にした状態で、その印象の焦点を観察することを目的としているため、特定品詞の抽出方法に文法的厳密性を置いていない。たとえば「いろいろな物」という記述の場合、児童が対象（物）を説明するために必要とした修飾部分である（いろいろな）や「あぜつのおばあちゃんのいえ」のように1つの対象を説明するための複合語は、一名詞部分を含む名詞部分についても分類上「名詞」として位置づけを行った。なお「わたし」「ぼく」に代表される代名詞に相当する部分は、単独使用においては記述中で特別な働きをもたない場合が多いことから除外した。

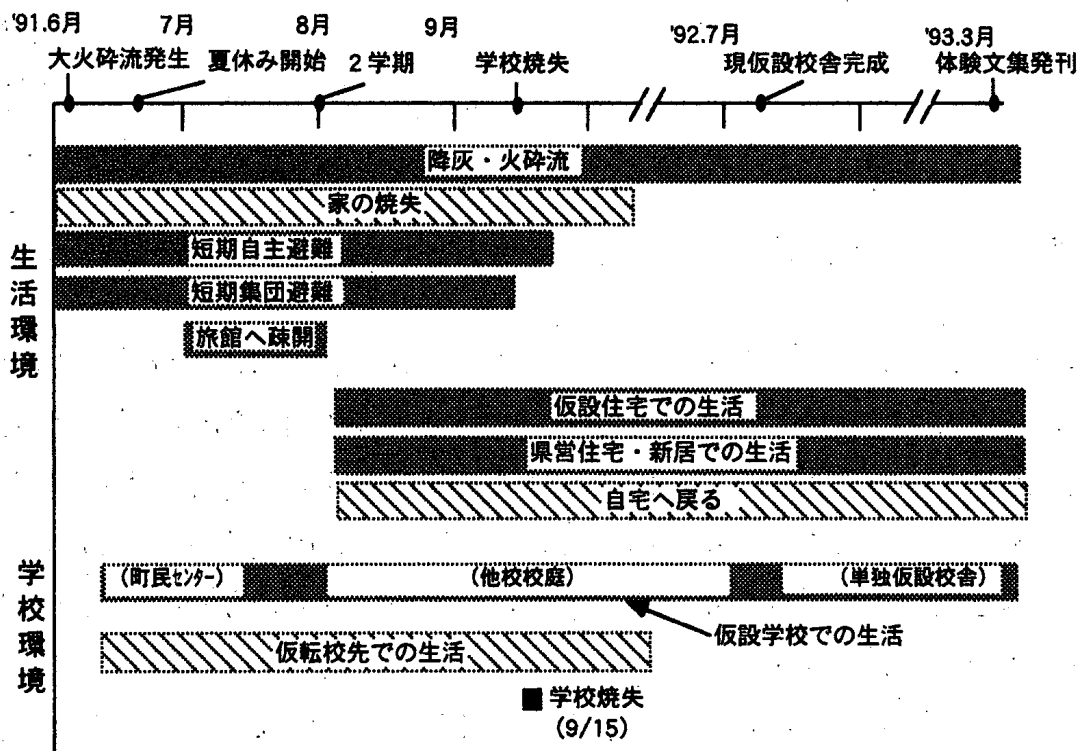


図2 噴火による環境変化の発生時期および継続期間

■：期間内にほぼ連続して発生が認められたことから
 ▨：期間内の一時点で発生したことから

4 節 結果

噴火後に発生した環境変化の中で、対象児童に関連のある出来事を図2によって時系列的に整理した。噴火災害体験文集の発刊時期（1993年3月）より約1年9カ月前（1991年6月）に大規模な火砕流が発生し、その直後はほとんど

8章 子どもたちから学ぶ地域創造の手がかり－児童の記述表現を用いた環境認識調査－
 の児童が避難生活を体験していた。避難生活の長期化に伴い児童の仮転校がみられたが、通学バスの整備や新学期の開始（1991年8月1日）、仮設住宅の建設とともに徐々に帰校してきた。自宅へ戻ることが可能になった児童がいる反面、長期に渡る仮設住宅での生活を経験した児童や代替地への転居を余儀なくされた児童もいた。児童による作文の執筆が行われた時期（1992年後半）の町

表1 記述表現の「状況」による郡分けと各郡内の名詞使用数

状況（環境・生活変化に関連）	記述人数（％）	名詞使用数（％）
短期集団避難 ^{A)}	28 (13.3) #	302 (10.3) #
短期自主避難 ^{B)}	27 (12.8) #	416 (14.2) #
火砕流	24 (11.4) #	285 (9.7) #
仮設学校 ^{C)}	18 (8.5) #	261 (8.9)
逃げる途中	15 (7.1)	140 (4.7)
旅館への疎開 ^{D)}	14 (6.6)	396 (13.5) #
仮設住宅 ^{E)}	12 (5.7)	230 (7.8)
仮転校先 ^{F)}	11 (5.2)	173 (5.9)
降灰	10 (4.7)	141 (4.8)
家の焼失	9 (4.3)	166 (5.7)
学校の焼失	7 (3.3)	51 (1.7)
元の家	6 (2.8)	28 (1.0)
県営住宅・新居 ^{G)}	4 (1.9)	54 (1.7)
残留校	2 (1.0)	124 (4.2)
その他	24 (11.4)	171 (5.8)
合計	211* (100)	2938 (100)

*：複数の記述を行っている児童が多いため、調査対象人数とは一致しない。

#：それぞれの分析による上位4項目。

A)：大火砕流あるいは土石流発生直後に町内、近隣の公共施設への避難。

B)：平成3年6月の大火砕流発生により自宅での生活が困難になった世帯が親戚、知人宅等へ避難した。避難先、避難人員、避難期間（数日～数十カ月）は各世帯で異なる。

C)：本校舎が平成3年6月より立入禁止、9月には火砕流の直撃を受け焼失したため、町民センター、隣接小学校校庭、現在地のプレハブ仮設校舎へと移転した。

D)：長期化する避難生活に対応するため、自治体が近隣の温泉地の旅館群を借り上げ、一定期間を被災者に提供した。

E)：自宅及び周辺の立ち入りが禁止あるいは制限された世帯、および家屋が焼失した世帯が入居した。

F)：噴火災害後、町外の親戚宅等へ避難した児童は最寄りの小学校へ一時的に転校した。

G)：噴火災害により家屋を失った世帯が入居した。

の様子は、前年と比較して火砕流の発生数は減少していたものの、降灰は慢性化し、風向きや天候によっては連日のように灰が降り続いていた。授業は依然として仮設校舎で行われており、仮設住宅から通学する児童も過半数を占め、また登下校時にはゴーグルなどの防塵具を着用していた。64人の児童の各記述表現を文章の形式に着目して分析した結果、64編の作文中に、最も多い児童で10個、少ない児童で1個の「形式的な文章のまとまり」が見いだされた。この形式的な文章のまとまりがどのような具体的意味づけに対応しているかを、図1右に示したような流れで判断した結果、児童の環境・生活変化に関連した「状況」14項目（“その他”を含めると15項目）が得られた（表1）。出現の多い順に見ていくと、＜短期集団避難＞が最も多く（28名13.3%）、次いで＜短期自主避難＞（27名12.8%）、＜火砕流＞（24名11.4%）、＜仮設学校＞（18名8.5%）であった。＜学校の焼失＞は対象児童全員に関係のある環境の変化であったが、取り上げた児童は7名（3.3%）にとどまった。それぞれの「状況」の記述の多さを観察するために、使用されている名詞ののべ数を取り上げた。状況別ののべ数と割合を表1の右半分に示す。結果、総数で2938個の名詞が確認された。1編あたり最も多い児童で86個、少ない児童で20個の名詞の使用が認められた。名詞数が多くみられた「状況」は、避難生活に関連するものであった。＜短期自主避難＞、＜短期集団避難＞は記述人数、見いだされた名詞数ともに、他の状況より多かった。逆に＜旅館への疎開＞は、記述人数は14名（6.6%）と、決して多くはないが、得られた名詞数は396個にのぼった。これは＜旅館への疎開＞に関する一人当たりの記述量の多さを反映しているものと考えられる。火山活動に直接関連した事項でありながら＜火砕流＞は記述人数、名詞数ともに比較的高値を示したが、＜降灰＞は低値であった。また、＜仮設学校＞、＜仮転校先＞など学校生活に関する状況が認められたことから、児童は被災の混乱時においても、学校生活に強い印象を持っていたことが示唆された。

ここまでの分析の流れを振り返ると、児童の視点を探るために、素材としては児童自身の記述表現（作文）を用い、また分析の外枠としては14項目の「状況」に着目してきた。しかしこの「状況」は、すでに述べたごとく作文執筆時に児童が教師から提示された手がかりに起因しており、これを児童自身の固有

の視点と見なすことには多少無理がある。そこで「状況」という外枠での把握に留まらずに、各記述表現を名詞へと解体して児童の表現に直接ふれる方向で分析を進めた。記述表現を名詞レベルにまで解体すると、確かに児童の表現に直接触れることはできるが、2938個にのぼる名詞をそのまま取り扱ったのでは、今度は多様性が大きすぎて分析が進めにくい。しかし14項目の「状況」に戻ってしまったのではせっかく見え始めた児童自身の表現を見失ってしまうことになる。そこで、特定の「状況」を文章化しようとした各児童が、その時にどのような具体的な事物に目を向けたかを、その児童が採用した名詞から判断し、その判断を集約する作業を試行錯誤的に行った。

その結果、14項目の「状況」とは異質の分類項目として、《場所》、《山》、《人》、《遊び》、《日常生活》、《時間》、の6項目からなる「注目（～への）」が得られた。得られた6項目の「注目」は、児童の記述表現の名詞レベルへの解体と再構成によって得られた新たな分類結果である。「状況」が全噴火災害期間を通して児童が体験した生活の場面を表すのに対して、「注目」はそれぞれの場面において、児童が実際に注いでいた視点の方向性や対象への関心を表すと考えられる。

そこで児童の視点と行動を理解する上で重要ないくつかの「状況」と「注目」の組み合わせについて分析を進めた。まずとりあげた状況は、噴火そのものに関係する<火砕流>と、児童自身に関係する<短期自主避難>、<旅館への疎開>である。さらに学校生活の特徴が現れている<仮設学校>についてもとりあげ、以上4つの「状況」について、それぞれの「注目」を示した（図3）。「けむり」、「くろいくも」などに代表される《山》への注目は<火砕流>においては全体の30%を超えていたが、他の「状況」ではいずれも5%未満という低い割合であった。《場所》への注目が高い割合を示していたのは、<短期自主避難>、<仮設学校>であり、それぞれ33.2%、28.7%であった。<仮設学校>は町民センターから他校校庭のプレハブ校舎、現在の仮設校舎へと1年間で3回の移転を行っている。<短期自主避難>も複数の避難場所へ移動したケースが確認されていることから、《場所》に注目した児童が多かったと思われる。《時間》への注目はいずれの項目においても10%前後の割合で共通して出現している。これは図3に挙げた4つの状況以外の群においても、ほぼ同程度

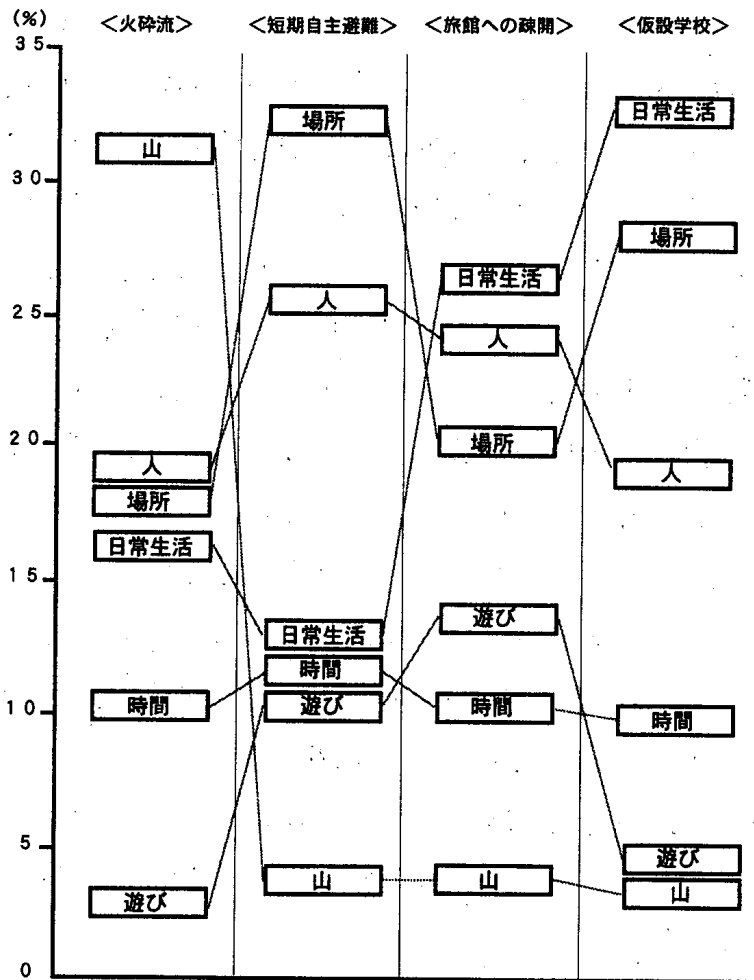


図3 それぞれの「状況」下における児童の「注目」の出現割合

の割合を示した。また、《遊び》への注目は<短期自主避難>、<旅館への疎開>では10%以上の割合で見られたが<火砕流>、<仮設学校>の場合は5%未満であった。これは<短期自主避難>、<旅館への疎開>が1991年の夏休みを中心とした時期に発生した状況であったため、他の状況と比較すると、相対的に遊びの種類、活動時間が豊富であり、それが印象の強さにつながったと思われる。<仮設学校>においては30%以上に《日常生活》への注目がみられたが、この場合の《日常生活》の内容は他の状況とは多少異なり、学校生活における授業の内容が中心であった。<短期自主避難>、<旅館への疎開>の2つの状況を比較すると、《山》、《人》、《遊び》、《時間》への注目は、類似した割合を示している。しかし、大きく異なる点は《場所》と《日常生活》への注目である。<旅館への疎開>に比べると複数地点への移動が見られる<短期自主避難>は《場所》への注目が多い。逆に、食事やそうじ、買い物などの

表2 4つの「状況」下における児童の「注目」の具体的内容

状況	<火砕流> n=285		<短期自主避難> n=416		<旅館への疎開> n=396		<仮設学校> n=261	
《場所》	計	(53) 18.6%	計	(141) 33.9%	計	(80) 20.2%	計	(72) 27.6%
《山》	計	(88) 30.9%	計	(14) 3.4%	計	(20) 5.1%	計	(11) 4.2%
《人》	お父さん (12) “だいすけ”くん (08) おかあさん (08) “いとこ”の“とおる兄ちゃん” (07) ばあちゃん (07) 計 (56) 19.6%	“さちこねえちゃん” (19) お父さん (14) お母さん (12) おばあちゃん (08) かぞく (07) 計 (106) 25.5%	“かずひろ”くん (26) りよかんのひと (17) “いとこ”の“まさこおばちゃん” (10) お母さん (07) 友だち・お兄ちゃん (各04) 計 (95) 24.0%	先生 (06) 1年 (04) “こうや”くん (03) 友だち (03) みかえ小の人 (03) 計 (52) 19.9%				
《遊び》	テレビ (04) かさ (02) リカちゃんにんぎょう (01) 計 (07) 2.5%	いぬ (05) さかな (03) テレビ (03) 川・海・きつね ・たぬき・かぶと虫 (各02) 計 (30) 12.0%	プール (09) おりがみ (06) 海 (05) さんぽ (05) さかな (03) 計 (55) 13.9%	はっぱ (03) アルプスいちまんじゃく (02) トランプ (02) 計 (13) 5.0%				
《日常生活》	でんわ (05) でんき (03) 音・仕事・勉強・みぞ・顔・いのち (各02) 計 (50) 17.5%	仕事 (05) 電話・車 (各04) ごはん (03) ニュース・お母さんのじっか 一番上の階・ラジオたいそう (各02) 計 (54) 13.0%	ごはん (08) おふろ (08) ごちそう (03) べんきょう (03) ニュース (03) おもいで (03) 計 (105) 26.5%	べんきょう (20) バス (10) こくどう (04) 焚下校・ヘルメット・園工 体育・タオル (各03) 計 (89) 34.1%				
《時間》	6月3日 (17) 9月15日 (03) 計 (31) 10.9%	なつやすみ (13) 6月3日 (06) まいにち (04) 1ヶ月 (03) よる (03) 計 (51) 12.3%	なつやすみ (08) まいにち (06) きよねん (04) 朝 (04) 夕方 (02) 計 (41) 10.4%	なつやすみ (05) 2がつき (02) 3がつき (02) 8月1日 (02) きよねん (02) 計 (24) 9.2%				

注) * : 2つの「注目」に関しては、各「状況」間で使用されている名詞に共通性が高かったため、全体数のみを示した。
 - : それぞれ個人名、親戚関係が記入されている。
 () : 出現回数
 % : 各環境変化項目全体に占める出現割合

《日常生活》への注目は<短期自主避難>が13%であるのに対し、<旅館への疎開>は26.5%であった。<旅館への疎開>において、《日常生活》への注目が多くみられたことは、生活環境変化による新鮮さだけで説明することは難しい。突然の噴火、降灰、避難生活という混乱した非日常的な生活が続く中で、被害のない温泉地へ家族で移動し、しばし災害とは切り離された日常を取り戻したことに強い印象があったと思われる。加えて、“ごちそう”や“ひろいおふる”などポジティブな要素を持つ空間での生活体験が、日常的要素への視点を多く持つ原因となったと推察する。以上の結果から、4つの状況下における児童の6項目にわたる「注目（～への）」の在り方が明らかになった。そこで、次にこの6項目の「注目」が具体的にどのような対象にむけられていたかについて、児童の記述表現にもどってさらに分析を進めた。図3で取り上げた4つの「状況」について、それぞれの「注目」の具体的内容を表2に示した。6項目の注目（《場所》、《山》、《人》、《遊び》、《日常生活》、《時間》）に含まれる具体的内容のうち、《場所》に関するものには“いえ”、“りよかん”“かせつの学校”など自分が生活している場所に該当する名詞が中心であり、

具体的な親戚関係や特定の意味を持つ地名（“ありえのじいちゃんの家”など）が用いられている場合も多くみられた。《山》の場合は6項目のいずれにおいても“ふげんだけ”、“かさいりゅう”という名詞が多かった。《人》、《遊び》、《日常生活》、《時間》への注目については、各項目ごとに、上位にあげられた具体的内容および出現個数、合計数、項目全体に占める割合を示した。ただし、児童の記述表現においては、同一の対象を示す際に、表現が異なる場合がある。例えば、“ばんごはん”と“よるごはん”、“じぶんの家”と“わたしの家”など類似性の高い名詞、同義語は複数にカウントしたが、その他の名詞はできるだけ児童自身の表現を尊重した。《人》への注目の具体的内容は、表示した4つの状況に共通して“さちこねえちゃん”、“かずひろ”くんに代表されるような個人名、あるいはいとこや叔母など、自分との関係を表記し、対象者を特定していた。《遊び》について観察すると、降灰や火砕流の影響から逃れた〈短期自主避難〉、あるいは〈旅館への疎開〉においては、動物や散歩、プールなど屋外での遊びに関する内容が中心であったが、他の状況下ではその傾向は認められなかった。《日常生活》の場合、〈仮設学校〉では“通学バス”、授業科目や教具（タイル）など学校生活に関連する内容があげられた。他の3つの状況においては、“ごはん”など家事に関することが多く認められた。〈火砕流〉の場合は“でんわ”、“でんき”や“音”、“いのち”など緊迫した状況を表す内容がみられたが、〈旅館への疎開〉には緊張感を帯びた具体的内容は認められなかった。《時間》は〈火砕流〉において6割以上が具体的日付による表現であった。特に“6月3日”、“9月15日”に視点が集中していた。これはいずれも大火砕流の発生日であり、前者は40名以上の死者を出した日であり、後者は火砕流により学校施設が全焼した日付である。〈短期自主避難〉、〈旅館への疎開〉は、夏休みを中心に実施されたため“なつやすみ”という表現が多かった。また“まいにち”という名詞が多用されていたことから、避難生活の長期化、日常化への視点の存在が推測された。〈仮設学校〉の場合は“なつやすみ”の他に、“2がっき”、“3がっき”という学校生活における節目を示す語句、“8月1日”という1991年度の変則的な新学期の開始日に注目していた児童が認められた。しかしながら、表2中において上位にあげられた具体的内容の出現個数が各「注目」の合計数に占める割合は決して高くはない。例え

8章 子どもたちから学ぶ地域創造の手がかり－児童の記述表現を用いた環境認識調査－
ば、〈短期自主避難〉の《日常生活》においては、全部で54個の名詞が得られた。表示している名詞（“仕事”、“電話”、“ラジオたいそう”など）24個は、複数の記述があった名詞である。残り30個の名詞は“まんじゅう”、“おはかまいり”、“せんたくもの”など、すべてが異なる名詞であり、1回のみ記述されたものであった。これは他の「状況」においても同様であり、“ビックリマンシール”、“犬のチェリー”、“夕日”、“エレベーター”、“たばこの葉”など、児童の視点は6つの「注目」下で、多種多様な具体的内容に向けられていた。このことから、記述表現における児童の視点の強い個別性も示唆された。

5節 考察

1. 本研究の方法論的特徴

本研究の過程で著者らが採用した児童の思考過程研究の方法論や、それによる分析から得られた結果（マトリクス）は、A小学校児童64名という限定された小集団の作文分析から得られたものであり、「ここでの方法論や得られた結果が他の集団や状況にも当てはまるか」といった外的妥当性を確認する作業は、今後の課題である。特に噴火災害の被災児童を対象として本研究の知見を他の集団に普遍化しようと試みる際には、近年の日本を襲った様々な自然環境下における児童の環境認識に注目した記述表現の収集と、それに基づいた実証的な研究が早急に必要とされよう。

2. 研究の内的妥当性の検討および今後の課題

一方、「本研究の知見は、噴火災害下におけるA小学校の児童の環境認識の細部をどこまで実証的に捉えているか」という研究の内的妥当性に関しても、今後さらに研究が必要なことは言うまでもない。14項目の「状況」と6項目の「注目」からなるマトリクスは、その中に形式的には84個（14×6）の組み合わせを含んでいるが、本論文ではその組み合わせの幾つかに焦点を絞り、結果の後半部において、名詞の使われ方を簡単に整理した。84個の組み合わせすべてを視野に入れた上で、それぞれの組み合わせにおける名詞の使用を確認し、個別の名詞の分析から得られる知見が相互に意味上の整合性を示すかを、他の

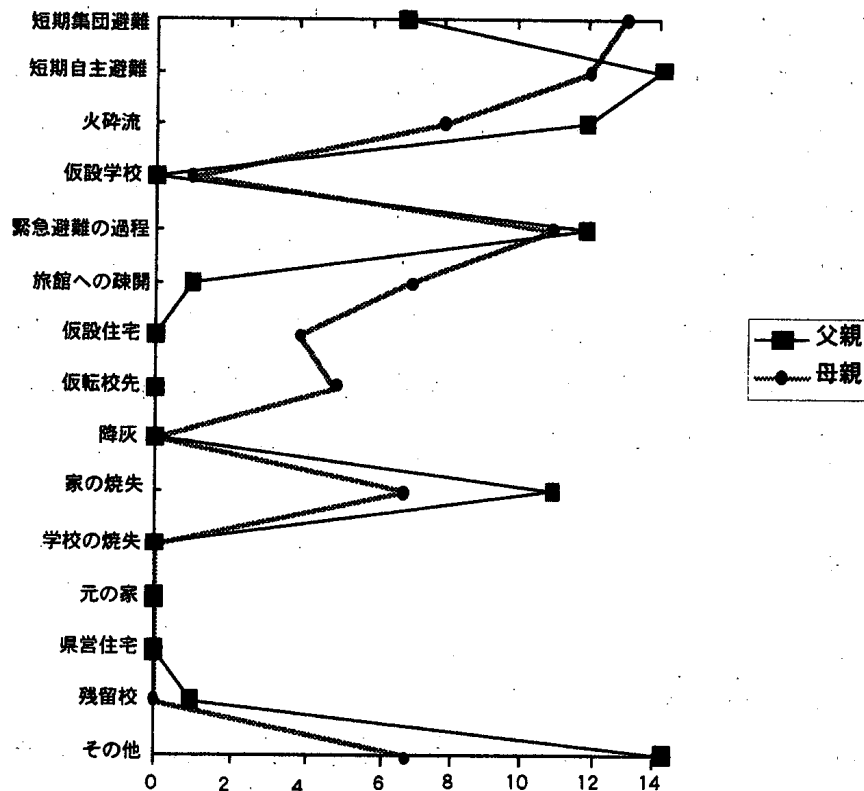


図4 各状況下における“父親”“母親”の出現割合

観察結果（著者らが補助的に行ってきた聞き取り調査など）から確認できれば、内的な妥当性はより確かなものになる。

このすべてについて検証を進めるのは著者らに課せられた今後の課題であるが、以下では児童にとって特に重要と判断される“親”と“遊び”に焦点を絞って、予備的に内的妥当性を検討した。例えば「状況」別に“父親”、“母親”それぞれの出現数を観察してみると（図4）、＜短期自主避難＞、＜緊急避難の過程＞では、“父親”、“母親”ともに高い出現を示していたが、＜短期集団避難＞、＜旅館への疎開＞、＜仮設住宅＞などは“母親”の出現が多く認められた。一方、＜家の焼失＞においては、“父親”の出現割合が高かった。これらの知見は、著者らが本研究において教師や児童に口頭で確認できた事実と整合する。すなわち、“母親”の出現が多かった項目に関しては、母親と共有した時間の多さが指摘される。逆に＜家の焼失＞において、“父親”の出現割合が高かったことは、焼失した家を確認するために、立ち入り禁止区域へ出かけたのが専ら“父親”であり、＜家の焼失＞に伴う様々な手続きを行ったのも

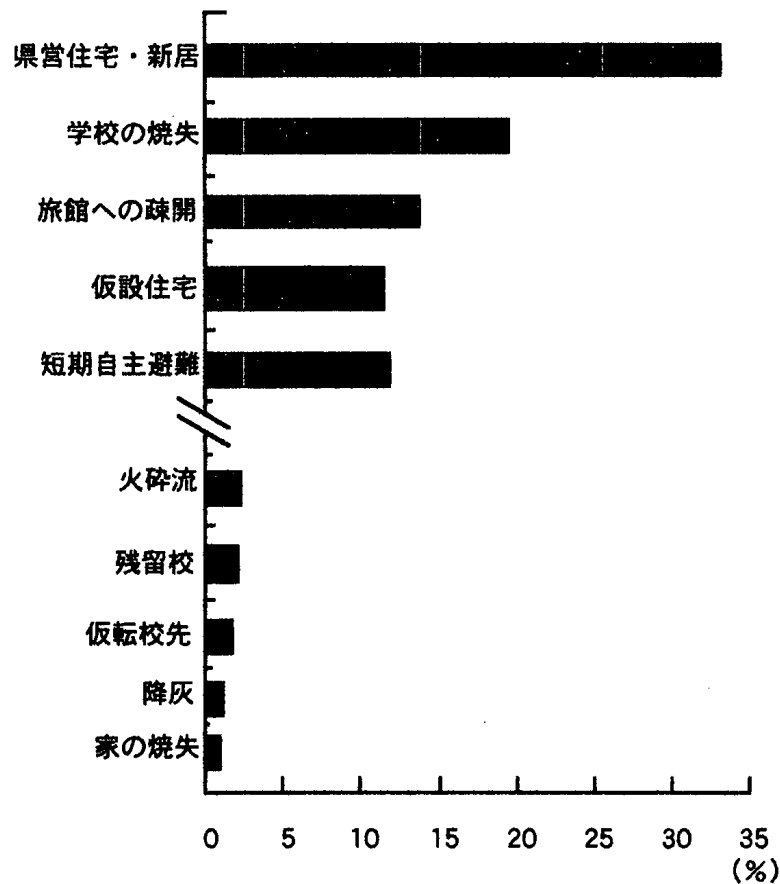


図5 《遊び》の占める割合が高値・低値を示した状況

“父親”が中心であった事実をよく説明している。一方、遊びについて整理してみると、《遊び》への「注目」は、「状況」を表す14項目のうち13項目に認められ、噴火災害という混乱した社会・生活環境下においても、《遊び》が大きな役割を果たすことが確認された。各「状況」における《遊び》に対する「注目」の割合を、上位、下位それぞれ5項目ずつ取り上げて観察した結果を図5に示す。＜学校の焼失＞に関連してなぜ《遊び》が出現するのかを、児童への聞き取りの結果と照らし合わせると、遊びの体験に由来する印象より、環境・生活変化の結果として不可能になった遊びや、焼失した遊び道具への思い出に視点が集中した事実が指摘される。構成名詞の3分の1以上を遊びが占めていた＜県営住宅・新居＞は、災害で自宅を失った児童が、転居後の新しい環境で行っている遊びの具体的内容が中心であった。また＜仮設住宅＞、＜短期自主避難＞など混乱した状況下においても、《遊び》への視点が多く見られた。児童や教師への聞き取りの結果からは、混乱した状況下においても、児童はポ

ジティブな体験（いろいろな楽しい事があった）に視点を向けることが出来ることが示唆されている。一方、〈残留校〉、〈仮転校先〉という学校に関連する状況において、《遊び》の出現が低い割合を示していた。通常の学校生活とは異なった環境や限られた人員構成による遊びは、印象が希薄であったと考えられる。ここで試みたような内的妥当性の検討をさらに先に進めるためには、児童と児童を取り巻く環境について、事例に即した総合的な情報が必要になろう。今後に残された課題と考えられる。

3. 今後の地域創造への課題

地域で暮らす児童の存在が、大人たちの行動や積極性に大きな影響を与えることは既によく知られているところである。深江町においても「被災の混乱時に、子どもたちの遊んでいる姿、明るい笑顔に励まされた」という談話を何人もの大人から耳にした。地域社会を担う重要な一員である児童が噴火災害という混乱した状況をどのようにとらえていたかを研究した結果、彼らの記述表現から14の生活・環境関連の「状況」（〈短期集団避難〉、〈火砕流〉、〈仮設学校〉など）、などすべての構成名詞からは6項目の「注目」（《場所》、《山》、《人》、《遊び》、《日常生活》、《時間》）と、児童が数多くの視点を持っていたことが明らかとなった。

特に、上位にあげられた「状況」および「注目」の内容から、児童は突発的環境変化時は自然環境の変化よりも生活環境の変化の方に強い印象を持っており、日常生活環境に対して高い関心を持つことが示唆された。このことは結果の部分でも述べた通り、〈旅館への疎開〉という一時的に日常性を回復した「状況」が比較的多くの児童によって記述されていた（表1参照）という事実から、その重要性をくみ取ることができる。また、児童の日常生活環境の重要な構成要素である学校生活に関する記述（〈仮設学校〉、〈学校の焼失〉など）が多くみられたことから、日常生活環境への高い関心が示唆された。

以上のことから、突発的環境変化時の児童の視点から考えたときの、よりよい地域づくりとは、日常性を大切にされた地域づくりを心がけることであるといえよう。学校生活の早期再開、家族を大切にされた空間の確保、隣人などなじみのある人々との交流などにおいて、たとえ部分的であっても生活の日常性を回

8章 子どもたちから学ぶ地域創造の手がかり－児童の記述表現を用いた環境認識調査－
復することは、児童にはポジティブに受けとめられていた。このことは児童だけではなく住民全体に当てはまると著者らは確信しているが、児童にとっては特に重要であったことが明確であり、地域再生はこの方向にベクトルが向けられなければならない。深江町という小さな地域が経験した突発的環境変化とその認識が、他の被災地域の地域再生、あるいは地域創造の手がかりの1つとして活用されることを期待している。

注) 本研究は福岡大学医学部公衆衛生学教室・守山正樹教授との共同研究の一部である。

文献

- 1) 高島町地域保健研究会（代表齋藤寛）：炭坑閉山の島から学んだこと－長崎県高島における学際的地域研究の試み－、昭和堂印刷、長崎、1991
- 2) Bruner, J.S., Garton, A.: Human Growth and Development. 寺田晃訳：子どもの成長と発達－その理論と教育－、新曜社、東京、1981
- 3) Piaget, J.: La psychologie de l'intelligence. 波多野完治、滝沢武久訳：知能の心理学、みすず書房、東京、1967
- 4) Piaget, J.: Six Etude de Psychologie. 滝沢武久訳：思考の心理学、みすず書房、東京、1968
- 5) 長崎県雲仙普賢岳災害復興室：雲仙岳災害・島原半島復興振興計画、長崎、1993
- 6) 深江町立大野木場小学校：かどわきの子ら－雲仙普賢岳噴火災害体験文一、長崎、1993

参考文献

- (1) 太田保之編著：災害ストレスと心のケア、医歯薬出版、東京、1996
- (2) 横尾美智代、守山正樹：わたしたちのくらしとふんか－雲仙普賢岳の噴火災害を体験した小学生の気持ち－、昭和堂印刷、長崎、1996
- (3) Burke JR JD, Borus JF, Burns BJ, et al: Changes in children's behavior after a natural disaster. Am J Psychiatry 139: 8: 1010-1014,

1982

- (4) Green BL, Koral M, Grace MC, et al: Children and Disaster : Age, Gender and Parental Effects on PTSD Symptoms. J Am Acad Child Adolesc Psychiatry 30: 6: 945-951, 1991
- (5) 守山正樹：対話的イメージ形成法による保健・健康教育の試み—学習者が外化・表出した受療行動イメージの実態と、そのフィードバックによる認識深化の誘発—、学校保健研究 38：434-449, 1996
- (6) 横尾美智代、守山正樹：噴火災害で被災した児童における環境認識の構造的把握—社会・自然環境変化に対する児童の視点を記述表現から探る試み—、日本社会精神医学会雑誌 6：185-196, 1998